

モンゴル自治邦における日本の衛生・医療活動：  
伝統社会から近代社会への移行  
(交感するアジアと日本)

|       |                                                                                                   |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2015-03-12<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: ハスチムガ<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.14945/00008106">https://doi.org/10.14945/00008106</a>                 |

# モンゴル自治邦における日本の衛生・医療活動 —伝統社会から近代社会への移行—

ハスチムガ

## 目次

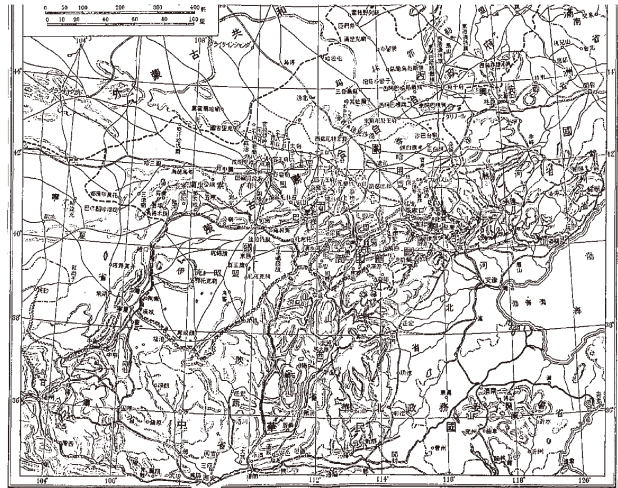
はじめに

- 1 『蒙古』という雑誌
- 2 モンゴル自治邦か蒙疆政権か
- 3 報告されたモンゴル自治邦の実像と虚像
- 4 衛生・医療に関する調査報告と制度の整備
- 5 モンゴル人側の動き

おわりに

## はじめに

万里の長城の北側は歴史的にずっとモンゴル人の領土でありつづけた、とモンゴルの政治家や知識人たちは認識している<sup>1)</sup>。20世紀前半においてモンゴル人の領土は中国と日本、そしてロシアの三つの勢力の角逐の舞台になった。日本はまず満洲国を創建し、そしてモンゴル人の徳王政権に対しても次第に影響を強めていった。日本は当時徳王の政府を「蒙疆政権」と呼び、その特殊性を以下のように強調していた<sup>2)</sup>。



地図1 蒙疆の範囲。伊東恒治著『北支蒙疆の住居』より。

<sup>1)</sup> 楊海英『中国とモンゴルのはざま—ウランフーの実らなかった民族自決の夢』岩波書店、2013年、264-266頁。

<sup>2)</sup> 「蒙疆建設の性格」『東亜』1942年11月、33-46頁。

- (1) 日支防共協定存続期間中特別地點に日本軍の防共駐屯を認むること及び内蒙地方を特殊防共地域とすること
- (2) 特に華北及び内蒙地域においてはその資源の開発利用上、日本に對し、積極的に便宜を與ふことを要求する。

このように、中国本土への權益を拡大し、国防と防共の必要性から内モンゴルへの関心が日本で高まっていたのである。ある研究者は次のように論じている。満洲国が建国された当初、同国の承認問題で精一杯だった日本は国際社会からの批判を避けなければならなかった<sup>3)</sup>。国際社会からの批判をかわす目的もあって、徳王指導下の内モンゴル中部への関与を強めていった。人力と費用の面で苦慮した日本は武力だけではなく、衛生・医療という社会事業を通じてモンゴルの人心獲得にも力を入れたのである。

一方、内モンゴル中部のモンゴル地方自治政務委員会（以下、蒙政会と略す）と中華民国政府との間の相互不信により、徳王にリードされたモンゴル人たちが日本の内モンゴル中部への関心を利用して自らの勢力を増大させようとしていた。

今までの研究において、ほとんど日本側の資料に基づいて「蒙疆政權」は日本の傀儡という視座からすすめられてきた。例えば、内田知行・柴田善雅 [2007]<sup>4)</sup>、中見立夫 [2013]<sup>5)</sup>、広中一成 [2013]<sup>6)</sup>、宝鉄梅 [2004]<sup>7)</sup>、田中剛 [2001、2010、2011]<sup>8)</sup>らの研究がある。ここで逐一取り上げないが、ほぼ同じ見方の研究はほかにもたくさんある。上の諸研究に比べて、日本とドイツに留学し、そしてノルウェーで研究活動を経て現在オーストラリア国立大学教授を務めるモンゴル人研究者のリ・ナランゴアは、日本とモンゴルという枠の外から日本・モンゴルの相互利用の関係について研究している。リ・ナランゴアらはまず、満洲国と「蒙疆政權」を傀儡だと表現するだけでは問題の本質が見えないと指摘している<sup>9)</sup>。彼女は更に言う。日本軍とモンゴル側は相互利用の関係にあった。植民地支配を受ける側が正面から抵抗するのは困難なため、宗主国の知的物理的資源と力を借りて、自分たちが将来自立できるよう利用する。これは、植民地支配下に生きる人々のいわゆる協力の裏に隠されている本当の姿ではないかと論じられている<sup>10)</sup>。

<sup>3)</sup> リ・ナランゴア「僧侶動員と仏教改革」『北東アジア研究』2014年、69-82頁。

<sup>4)</sup> 内田知行・柴田善雅『日本の蒙疆占領』研文出版社、2007年。

<sup>5)</sup> 中見立夫『「満蒙問題」の歴史』東京大学出版社、2013年。

<sup>6)</sup> 広中一成『ニセチャイナ—満洲・蒙疆・冀東・臨時・維新・南京』社会評論社、2013年。

<sup>7)</sup> 宝鉄梅「蒙疆政權下の対モンゴル人日本語教育について」『現代社会文化研究』31、2004年。

<sup>8)</sup> 田中剛「「蒙疆政權」の留学生事業とモンゴル人留学生」『歴史研究』38、2001年、99-137頁。

<sup>9)</sup> Li Narangoa and Robert Cribb, 2003, *Japan and the Transformation of National Identities in Asia in the Imperial Era*, in Li Narangoa and Robert Cribb (eds), *Imperial Japan and National Identities in Asia, 1895-1945*. London and New York: Routledge

筆者は既にいわゆる「蒙疆政権」の衛生・医療状況が日本人の目にどのように映っていたかについて、日本側の調査資料を用いて分析した<sup>10)</sup>。本研究ではリ・ナランゴアの指摘と実際にモンゴルの自治独立運動をリードした当事者たちの見解を踏まえて、日本による衛生・医療活動の宣伝に注目する。具体的には中部内モンゴルにおいて衛生・医療の近代化を促進して行く中でモンゴル人と日本人の見方の違いについて善隣協会の発行した『蒙古』雑誌を用いて考察を進めていきたい。

## 1 『蒙古』という雑誌

まず、『蒙古』雑誌の発刊について説明しておこう。

善隣協会の目的を達成する事業として東京の本部に調査部を設けて、蒙古に関する調査研究にあたり、定期刊行物や単行本が出された。そのうちの一つは『蒙古』雑誌である。山田信夫の「日本人によるモンゴル研究」<sup>12)</sup>では以下のように述べている。

定期刊行物として、当初はタイプ刷の『調査旬報』を三十一号まで、一九三五年一月から月刊『善隣協会調査月報』を、その後、機関誌として『蒙古』と改称して（一九三九年四月より）一九四四年まで刊行した。（中略）当時のモンゴルに関する知識の普及に、大きな役割を果たしたものである。

山田信夫によると、『調査旬報』の詳しい発刊年はないが、『調査旬報』という名称で31号まで発行した。また、現在日本各地の図書館に保管されている『善隣協会調査月報』の番号からみると発刊最初の番号は32号から始まっているようである。『調査旬報』の31号以降は『善隣協会調査月報』という名称で発刊されることになっ



写真1 厚和と今日のフフホト市にあった善隣協会厚和支部の正面。『蒙古大観』昭和13年版より。

<sup>10)</sup> リ・ナランゴア、前掲論文。

<sup>11)</sup> ハスチムガ「内モンゴルにおける衛生・医療に関する調査報告について—善隣協会と陸軍軍医部による調査—」国際シンポジウム『20世紀初、中国周縁エスニティの覚醒に関する比較研究』発表用論文、早稲田大学、2014年12月20日、30-46頁。

<sup>12)</sup> 日本モンゴル協会、前掲書、山田信夫「日本によるモンゴル研究」9頁。

たと推定されることができよう。また、善隣協会創立当初からその調査部に属し、モンゴルの調査研究を中心に携わってきた後藤富男の回想によると、『善隣協会調査月報』は1939年4月以降に機関誌として『蒙古』と改称した<sup>13)</sup>。1939年という年はモンゴル人にとっては大きな夢を持たせた時期であった。この年に蒙古聯盟自治政府が成立したからである。日本もまた内モンゴル中部での権益獲得が成功しつつあった。日本政府の対モンゴル政策の変化より、調査研究で得たモンゴルの歴史や文化などあらゆる状況を善隣協会は自らの機関誌において宣伝し紹介する必要があった。刊行物を通じて植民地モンゴルの姿を国内の日本人に伝えようとして『蒙古』は編集出版されていたのである。

本研究では、「蒙疆政権」(モンゴル自治邦)の衛生・医療状況を日本国内にどう伝えられていたのかについて、『蒙古』雑誌を用いて分析を加えたい。また、モンゴル人たちは日本による衛生・医療活動をどう受けとめていたのかについても、「蒙疆政権」に関わっていた人たちの回想録からみていきたい。

## 2 モンゴル自治邦か蒙疆政権か

ここまで筆者は、従来の研究者が使ってきた「蒙疆政権」という表現を援用してきた。しかし、これは再検討が必要な概念である。「蒙疆政権」ではなく、正確にはモンゴル自治邦とすべきで、しかも、モンゴル自治邦政府は日本の植民地ではなかったと主張したい。というのは、モンゴル人は自分たちの力を増大させるために日本を利用しようとした。この点については、モンゴル自治邦の最高指導者の徳王とその側近のジャクチト・スチン(札奇斯欽)らも同じ証言を残している<sup>14)</sup>。

1911年に漠北モンゴルは独立を宣言した。その後、中華民国とロシアの圧力をうけて一時独立を撤回させられたが、ソヴィエトの援助で1924年にモンゴル人民共和国を建国した。モンゴル人民共和国の誕生を見た漠南の内モンゴルでは、1933年夏に外国勢力の煽動や示唆を受けずにモンゴル人主体の自治運動がバトハーラガ(百霊廟)で勃発した。各旗の王公貴族やモンゴル人知識人らが集まって、第一、二回自治会議が開催されたのである<sup>15)</sup>。この自治会議は全モンゴルの各階層の支持を得て、中華民国中央政府に対し、内モンゴルの自治を認可し、自治政府の設立を要求した。

---

<sup>13)</sup> 後藤富男「善隣協会は何をやり残したか」日本モンゴル協会編『善隣協会史—内モンゴルにおける文化活動』1981年、5頁。

<sup>14)</sup> ドムチョクドンロブ著『徳王自伝』(森久男訳)岩波書店、1994年。札奇斯欽『我所知道的徳王和當時的内蒙古』中国文史出版社、2005年。

<sup>15)</sup> 札奇斯欽、前掲書、88頁。

その要求の具体的な内容は以下の四点である。

- 1、チンギス・ハーン時代に蒙古は欧州・アジアを占領して、遠近仰ぎ服従し、中原を平定して、全国各民族は平穏で盛況を呈した。
- 2、民国以来、蒙古で開墾・屯田が始まり、やがて省・県が設けられて、蒙古民族の衰退をもたらした。
- 3、ソビエトロシアは蒙古に十年間の苦痛をもたらし、東部内蒙古の各旗も日本に占領されており、西部の各盟旗はみずからを救うため、すみやかに自治を必要としている。
- 4、総理孫中山先生の「弱小民族を助けてその自決・自治を促す」という遺訓に基づき、蒙古が自治政府組織して、高度自治を実行し、外からの侮りを防いで国家の存続をはかり、国防の強化をすすめるのを許可するよう要求した<sup>16)</sup>。

その結果、9カ月のやりとりを経て1934年4月にバトハーラガで正式に蒙政会が成立した<sup>17)</sup>。

1934年9月、フフバートル（韓鳳林）という人物が国民党憲兵第三団（北京）に逮捕された。彼は徳王の有力な助手で、かつて戴天義塾での勉強を経て、日本陸軍士官学校を卒業した後に蒙政会の保安隊総隊長を務めていた。12月、「北平民衆売国奴一掃団」の名前で印刷されたビラがバトハーラガの蒙政会事務所に届けられた。その大意は、フフバートルが日本と連携し、国民や国家に背いて民族を売り渡した裏切り者という罪で処刑したとある<sup>18)</sup>。実際のフフバートルは関東軍の満蒙政策に批判的で、満洲国興安省の施政に失望して徳王のモンゴル自治運動に参加した。蒋介石はモンゴル人知識青年を自らの陣営に引き入れるため、フフバートルを内モンゴル軍官学校準備委員長に任命したが、彼は国民党に協力しなかった。そのため国民党はフフバートルが日本の特務ではないかという疑いを抱いて殺害に至ったのである<sup>19)</sup>。

フフバートル暗殺事件により、国民党政府の支配下では、民族ではなく、宗族としてしか認められず、蒋介石政府から得られるのは地方自治に過ぎないと悟ったモンゴル人たちは民族自決を獲得するように方針転換した。そこで、日本の力を利用して自分たちの目的を実現させたいと考えはじめた。時を同じくして、日本もこの機会に乗じて徳王に接近しようとしていたので、モンゴル人たちも一層日本と連携

---

<sup>16)</sup> ドムチョクドンロブ、前掲書、29-30頁。

<sup>17)</sup> ドムチョクドンロブ、前掲書、60頁。

<sup>18)</sup> ドムチョクドンロブ、前掲書、65-69頁。

<sup>19)</sup> ドムチョクドンロブ、前掲書、63頁。



写真2 日本時代に撮影されたモンゴル聯盟自治政府の正面。『蒙古大観』昭和13年版より。

しようと動きだした<sup>20)</sup>。

1936年1月、国民党中央からバトハーラガの蒙政会を分裂させる工作がはじまった。蒙政会の弱体化に伴い、徳王らは日本と連携して、自決運動を進めていた。同じ年の5月に日本の援助を受けて西スニットにモンゴル軍政府が成立された<sup>21)</sup>。ここで徳王は、軍事・行政の権力を一手に握っていた。ただし、これは日本人顧問を加えた軍政府であった。1937年の盧溝橋事件以降に、日本軍は北平・天津を占領したのちにさらに西進し、途中モンゴル軍の協力を得て察南自治政府、晋北自治政府が設立された。最終的には帰綏（現フフホト）を占領してから1937年10月にモンゴル聯盟自治政府、続いて1939年9月にモンゴル聯合自治政府へと改称した。

徳王による二回目の日本訪問後に、モンゴルの建国問題が両国の課題となってきた。日本政府と困難な交渉・妥協を経て、1941年8月4日

に張家口でモンゴル自治邦の誕生が全世界に宣告された。モンゴル人は「国」という字を使いたかったが、日本側は「邦」に拘った。この拘りには日本側の政策が変化したことが反映されていた。しかし、「国」だろうと、「邦」だろうと、モンゴル語ではどちらも ulus なので、モンゴル人たちはある程度満足せざるを得なかった。

少し前後するが、1938年10月、金井章次の意向に沿って徳王らは初めて日本を訪問した。10月19日に日本に到着し、歓迎会の人々とあいさつする際、いつものとおりに「蒙古」と言ったことに対し金井は参会者や記者らに「先程、徳王が言った「蒙古」とは「蒙疆」のことです」と説明するので、それに徳王は非常に不満であった。近衛内閣総理大臣と面会する時も「現在、蒙古民衆は「蒙疆」という名称を望まず、「蒙古」で新政権を代表させたい<sup>22)</sup>と話した。徳王は日本滞在中に東京放送局の招聘で全国放送のラジオ番組に出演することになった。その際にも金井は「蒙古」を「蒙疆」と言うよう強要するため、人を派遣して徳王の通訳である徳古来を脅迫し次のように言った。

<sup>20)</sup> ドムチョクドンロブ、前掲書、96頁。

<sup>21)</sup> ドムチョクドンロブ、前掲書、136頁。

<sup>22)</sup> ドムチョクドンロブ、前掲書、218頁。

徳王が日本にいる間、ふたたび「蒙古」や「建国」と言うのを許しません。徳王がまたそう言ったら、日本語に通訳しないで、「蒙古」の二字をすべて「蒙疆」に直しなさい。さもなければあなたの首が危ないですよ<sup>23)</sup>。

徳王は最後まで「蒙疆」と言わなかった。「蒙古<sup>モンゴル</sup>」という一文字に重大な政治的・民族的意味が含まれていた。「蒙古<sup>モンゴル</sup>」は民族のみならず、土地・人も意味しており、しかも、「蒙古<sup>モンゴル</sup>」は昔から世界中に知られている名称である。一方、「蒙疆」は中国の辺境で独立したモンゴル政権ではなく、中国に隷属する地方政権を意味することになる<sup>24)</sup>。但し、衛生・医療活動はこのような政治的環境の中で推進されていたことを理解しなければならない。「蒙疆政権」という言葉はモンゴル人の望ましい政権名ではない、それは日本が押し付けた名前である<sup>25)</sup>。以下本論文では、筆者はモンゴル自治邦という正式な名称を用いて研究を進めて行く。

### 3 報告されたモンゴル自治邦の実像と虚像

かくして成立したモンゴル自治邦であるが、それでは当時モンゴル自治邦にかかわった日本人たちはモンゴル人に対して、いかなる認識を抱いていたのだろうか。ここではまず一例として、岩瀬敏雄という人物が『蒙古』(昭和16年6月)に寄せた「蒙古人教育の理想」という文章に注目してみたい<sup>26)</sup>。

岩瀬はモンゴル人に対して近代的な教育を日本が施そうとした際に、「障碍」があると主張している。彼はモンゴル人の「頑迷固陋・無智蒙昧なること」を挙げている。岩瀬の文は以下のとおりである。

教へようとする文明人に對する場合、異常なる反抗を示す場合さへも生ずる。例へば傳染病に斃れる場合、それが如何に危険であるにもかゝらず、依然舊態なる風葬儀を續ける。

例えば、伝染病が流行っていても、風葬を維持しつづけている事例に注視してい

---

<sup>23)</sup> ドムチョクドンロブ、前掲書、220頁。

<sup>24)</sup> トブシン整理『内蒙古文史資料第十三輯・徳穆楚克棟魯普自述』中国人民政治協商會議内蒙古文史資料委員会、1984年、77-78頁。金井が「蒙疆」という言葉に粘り強くこだわった理由については本論文のテーマと関わないためここで省略する。

<sup>25)</sup> 二本博史は蒙疆政権の性質について、以下のように指摘している。「『蒙疆政権』は“第2の満洲国”の性格と、モンゴル人の“自治国”の性格をあわせもつ政治組織であった」。二本博史「蒙疆政権時代のモンゴル語定期刊行物について」『日本モンゴル学会起用』第31号、2001年、17-43頁。

<sup>26)</sup> 岩瀬敏雄「蒙古人教育の理想」『蒙古』、昭和16年6月、42-66頁。

る。こうした「頑迷」なところは「社会意識の相違」に由来すると岩瀬は指摘する。

婦人の貞操に対する觀念の如き今更喋々する迄もないが、我々日本人としては到底想像だに及ばぬことである。

このように、彼はいわゆる「貞操觀念」の違いを以て、社会意識の相違の根拠としている。それだけではなく、深層にはモンゴルが「母系民族である」と論じている。

母系といふことは亂れたる性生活を豫想する。これは私共の見る所全く想像以上である。特にラマ僧に對盲信の如き恐るべき弊害（彼等は知らない）を醸し出してゐる。性病の傳播、亂倫は妊娠率を低下せしめてゐること。性を早くより知ることの勉學上多大の障礙をなすことは全く學者の説明を待つ迄もない。

母系社会云々や性生活が乱れているとの指摘はまったく的を外れである。しかも、モンゴルは母系社会ではない<sup>27)</sup>。母系か男系かで以て性生活の「亂れ」や「貞操觀念」の欠如を論じるのは非科学的であり、対象社会に対して学術的な調査研究をしたとは言えない。

岩瀬は次にモンゴル人の「乱倫を極める性生活」を「居住の粗惡」と関連させて書いている。

衛生觀念の缺除に極めて連繋は多いが、如何に乾燥地帯であるとはいへ、地面の上に、一、二枚のチャンズ（毡子）を布いてゐるだけで、どうして良いといへやうか。更に、零下三十度にさへもなるといふ極寒の地に、チャンズ一、二枚の圍ひで寒さが防げることか。又牛糞の如き燃料を用ひるのに、その排煙排氣の設備の貧弱なるが如き、我々の鑒鑒すべき態の居住である。かゝる雰圍氣に成長する人間の教育上よさゝうな筈がない。漸くにして四、五人しか寝られない包内の雜然なる有様、而も亂倫を極める性生活、私はこゝにも又恐るべき教育障礙を認めずにはゐられない。

以上のように、住居内の設備の貧弱さに触れてから直ちに「乱倫」に飛躍しているが、両者の間に明確な因果関係がないのは明らかである。「衛生觀念の缺除」はまた以下のように燃料の使用にも原因があるとしている。

---

<sup>27)</sup> ウラデミルツォフ『蒙古社会制度史研究』生活社、1941年。

而も室内外、牛糞・羊糞をもつて足の踏み場もないやうな現在の状況である。傳染病の豫防に對する注意が向けられてゐない。こんな例を私は聞かされて、聊か呆然たるものがあつた。

牛糞や羊糞は自然環境に優しい燃料である<sup>28)</sup>。しかし、それに対する岩瀬の理解と認識は不十分である。彼は最後に以下のように断じている。

故に治療をあたえ、薬品を施興するのみでは到底この廣い草原に散在する蒙古人の而も極めて稀薄なるに人口に對して、十分手の廻り切れるものではない。自覺の上に立つて衛生が守られる様にしてやることは、蒙古人減少の救はれる第一の道具であることを信じる。疾病の治療を考へずに、高僧の祈禱に縋つてゐては（こゝが至難の著眼點）なほるべき傳染病もかへつて蔓延させるといふ逆結果は、餘りに多い實狀である

以上のように、岩瀬はモンゴル人に対して「衛生が守られる様にしてやること」の必要性を強調し、「高僧の祈禱」に頼らずに近代衛生・医療が導入すべき重要性を唱えている。彼がモンゴル人社会を「母系」と断じて、「乱倫」と「貞操觀念」の欠如を大げさに描写していることは、かえって本人のモンゴル社会に対する無知が露呈したことを表している。ちなみに1941年にモンゴル自治邦で調査を実施した伊東恒治は同じようなことを書いている<sup>29)</sup>。

防暑防寒力何れも少なく、且つ蒙古人の清潔觀念の缺如せると相俟って、包内の衛生状況は甚だ不良である。但しブリヤート蒙古人は現在の内蒙古地方に住むハルハ蒙古人よりは數等進化せる生活をなしてゐる。

伊東はロシア文化の影響下にあったブリヤート・モンゴルの方が、内モンゴルのモンゴル人よりも近代化が進み、そのためにより「進化せる生活をなしてゐる」という。

同じ『蒙古』昭和14年10月号に中国地理学の古典的な権威リヒトホーフエンの『支那日記』の中から、モンゴルに関する部分が翻訳されてある。彼は1871年10月から72年5月まで中国本土からモンゴルまで各地の風俗、習慣、地理学的、地質的

---

<sup>28)</sup> 家畜のフンについては、モンゴル人の包海岩が積極的に研究を進めている。包海岩『社会主義中国内モンゴルにおける牧畜文化—社会主義的集団牧畜から資本主義的酪農文化へ—』名古屋大学大学院文学研究科、2014年度博士学位申請論文。

<sup>29)</sup> 伊藤恒治『北支蒙疆の住居』弘文堂、1943年、120頁。

特徴を詳細に日記に書きまとめて残している。『蒙古』に翻訳して載せた記事はその中のモンゴルに関わる一部である。

村は黄土の山腹に散らばっており、村民たちは黄土の洞穴に住んでゐるので、村の外観は極めてみずばらしい。だがその洞穴の内部は貧相であるが、清潔だ<sup>30)</sup>。

村民は洞穴に住んでいて、貧相であって衛生的であったことがわかる。



写真3 内モンゴルのブリヤート・モンゴル人。伊東恒治著『北支蒙疆の住居』より。原題は「内蒙に於けるブリヤート蒙古人総管夫妻」。

ある蒙古の村に著いた。そこに蒙古の役人が住み、ラマ廟がある。(中略) 支那風に造られた家と庭は實に清潔で、きれいだった。部屋毎に蒲團と覆ひのあるカンがあつた。(中略) 廟は卓子の上へでもものつけたいやうな美し建物だった。内部は支那の寺院に見られないほど清潔で、きちんとしてゐる<sup>31)</sup>。

支那風の家に住むモンゴル役人の家と庭は衛生的で、その近くにあったお寺の中も中国風の寺院で見られないほどきれいであった。

蒙古の油の一杯入つてゐる小皿のなかの燈火は、いつもゆらと燃えてゐる。その数はおそらく百以上もあつた。そしてすべてが恐ろしく清潔だった<sup>32)</sup>。

その「油の一杯入つてゐる小皿」はモンゴル語でジューラと言う。お寺や家庭で仏像の前で祀る燈火である。中に入れている油はモンゴル人の家庭で作ったバターである。モンゴル人の生活中で仏像と書物を一番大事する、人の手足が簡単に届かないところにきれいに置くのが家庭教育でもよくみられる現象である。

その爐の上に平たく圓い鐵製の鍋がかけられ、(中略) きれいなつや磨かれた

<sup>30)</sup> リヒトホーフエン著、土井義信譯・編「蒙古日記」『蒙古』昭和14年、10月、42頁。

<sup>31)</sup> リヒトホーフエン著、土井義信譯・編、前掲文、45頁。

<sup>32)</sup> リヒトホーフエン著、土井義信譯・編、前掲文、46頁。

箱がいくつか並んでいる<sup>33)</sup>。

以上のリヒトホーフエンの調査日記には繰り返し清潔であったという言葉が見られる。19世紀後半のヨーロッパ人の眼に映ったモンゴルはきれいで清潔であったということがわかる。このことから、日本人がことさらに強調する「非衛生的」との表現は疑わしいと指摘しておかねばならない。

#### 4 調査報告と制度の整備

モンゴル自治邦は、統治開始早々から域内の各地で調査を実施しモンゴル人の衛生・医療について情報を収集した。例えば、以下はウランチャブ盟オラト中公旗で行われた調査報告の一部である<sup>34)</sup>。

中公旗の冬季の気温は、零下二十八度に下ることが二三回はあるが、平均二十度位なもので餘り寒くない。だが、気温の激變は驚くべきものがある。(中略)今年六月のことであった。私が綏遠に出かけると急に報せが来て、小學生が二十數人重病になつてをる。早く歸つてくれ、といふのである。歸つて見ると喝病を起してをる者がある。蒙古では氣候の變化に應じて衣類の調節をする着意が乏しいので、気温の激變のため喝病を起こすことがあり、日本人などは、呑氣に構えてをると喝病と一緒に凍傷を併發することもあるのである。六月は書間は夏服を着てをるが、夜は零下三度の気温に低下する。病人が出来たといふので松明を振り廻したり、惡魔拂ひの鐵砲を打ったり、大騒ぎだったが、結局四五名の者が出たやうであった。

この調査報告書の著者は明示されていないが、静岡県出身の医者だったことが後続の文書からわかる。当時のモンゴル社会では、近代医学はほとんどない状態であった。病人が出た時も「松明を振り廻したり、惡魔拂ひの鉄砲を打ったり、大騒ぎだったが、結局四五名の者が出たやうであった」。この医者はモンゴルの過酷な自然環境が原因で小さな病気でも凄惨な結果を招くことがあると示唆している。そういう意味で衛生・医療の近代化が必要であったと言えよう。

日本人たちはその後も精力的に各地で調査を続けた。例えば、『蒙古』は以下のような情報を伝えている<sup>35)</sup>。

---

<sup>33)</sup> リヒトホーフエン著、土井義信譯・編、前掲文、46頁。

<sup>34)</sup> 「中公旗の蒙古人」『蒙古』昭和14年10月、121-122頁。

<sup>35)</sup> 「蒙古人の發育が悪い」『蒙古』昭和14年9月、205頁。

蒙古人の體育狀態が他民族に比して二、三ヶ年遅れる事實に鑑みこれが原因を探查すべく察南病院々長宮本博士はこのほど漢蒙回三民族の食物の種類及びその攝取量の比較研究に着手した。この研究の完成の暁は蒙疆地域民に大きな福祉を齎らすものとして期待されてゐる。

このように、宮本は「蒙古人の體育狀態が他民族に比して二、三ヶ年遅れる」ことに注目している。彼はこのような情報に即して「漢蒙回三民族の食物の種類及びその攝取量の比較研究に着手した」ことも記されている。そして、この研究により「蒙疆地域民に大きな福祉を齎らすものとして期待されてゐる」とも付け加えている。

日本側の医学関係者はモンゴルの「蒙疆の風土病」に注目した<sup>36)</sup>。モンゴルの具体的風土病として「再歸病（傷寒病）、發疹熱、波狀熱、眼蠅蛆症」などをあげている。

風土病の他「蒙古の病氣」については、「最も一般的な病氣の中には、疹癬とリウマチがあり、他の病氣としては黴毒、皮膚發疹、胃の疾患、外傷等がある。これらに對し彼等は最も不合理な藥を處方する」と記されている。具体的な事例として性病とその「原因」に注目している。

蒙古における性病の蔓延には、（中略）正確な統計はないが少なくとも六〇パーセント以上はこれに罹つてゐるといつてよい。（中略）其の原因については、遊牧民といふものは性的生活において放縱なものである。（中略）風景は全く單調を極めてゐる。そして又生活も同様である。相手は家畜のみであるが、これには大した注意を必要としない。原始的な放牧だからである。生活には暇が多い。しかし、この暇をうめる何ものもない。人も少い。うるほいは全くない。この蒙古草原の遊牧民のみならず、遊牧民といふものは多く同様であるが蒙古においてはことにそれが甚だしい。従つて彼等の性的生活が放縱になつてゐたのは當然といはなければならない。一たび蒙古に侵入した性病は蒙古人のこの放縱のために、忽ち廣く傳播してしまつたのは又當然である。かゝる狀態に對し、目下單に醫療のみを行つてゐるが、これは策を得たものとは決して言へない。即ち衛生思想、（中略）性道德の確立が必要である<sup>37)</sup>。

科学的な統計がないままモンゴル人の性病に罹っている人口は60パーセントに達

---

<sup>36)</sup> 「蒙疆の風土病」『蒙古』昭和18年11月、56-59頁。

<sup>37)</sup> 「蒙古の病氣」『蒙古』昭和18年3月、98-99頁。

すると結論付けている。その原因もまず、モンゴル人の「放縦」さにあるという。続いて、「風景の単調」さ、「家畜相手の生活」「生活に暇が多い」こと、「人が少い」ことなど原因としている。何よりも遊牧という生業を「原始」的としている見方はマルクス流の発展段階論に基づく解釈である。遊牧は「原始的な生業」ではなく、一つの文明である、と現在の人類学者たちは強調している<sup>38)</sup>。

日本人の調査は他の地域にも及んだ。ウランチャブ盟西公旗での調査は以下のようになっている。「健康状態を調査することは只外観的な観察でしか得られなかった。西公旗で最も多くみられる疾病は眼疾患、性病、皮膚病の患者である」。報告書はさらに以下のように実態を伝えている。

眼疾病患者の蔓延は全蒙地に於いて見られる。これは毎日の暖を取る燃料が總て家畜の乾糞が燃えされ、室内不燃焼有害瓦斯の充満することが多い。これは目を常に刺戟する。又春先から夏へかけての強風は砂塵を卷いて吹きすさぶ、こらは眼球面を傷つけ、又、特殊の羊蠅が眼に飛込み蛆を生じ眼蛆病となる。そして水を神聖視する風習と水の不自由さは着衣類の洗濯を行はない等の不潔、光線の弱さは急性慢結性膜炎トラホーム等の誘因をなしてゐる。花柳病の蔓延の理由として考えられるものは男女別人口構成の不均衡、性的交渉の放縦、及び貞操觀念の缺如、喇嘛教の影響による迷信、衛生知識殊に性衛生知識の缺乏。生活的無為、怠情、娛樂慰安の缺乏、醫療施設の不備等が原因してゐると考えられる<sup>39)</sup>。

ウランチャブ盟西公旗で行った調査報告でも同じくモンゴル人の病気については眼疾病と性病、そして皮膚病などに注目している。その原因はまず、眼疾病の患者が大勢いるのはモンゴル人の生活中的家畜の糞を燃料として使うところにあるとしている。その際に有害瓦斯が眼を常に刺激しているのが原因の一つとしている。まだ、強風が巻き起こす砂塵も原因としている。「羊蠅が目に飛び込み蛆が生じ眼蛆病」になるとも分析している。

性病についてはウランチャブ盟西公旗でも調査を行った。性病蔓延の原因として、「男女別人口構成の不均衡、性的交渉の放縦、及び貞操觀念の缺如、喇嘛教の影響による迷信、衛生知識殊に性衛生知識の缺乏。生活的無為、怠情、娛樂慰安の缺乏、醫療施設の不備」などを並べている。こうした指摘は、上で紹介した性病分析の手法と同じである。

---

<sup>38)</sup> 松原正毅「遊牧からのメッセージ」楊海英『草原と馬とモンゴル人』日本放送出版協会、2001年、i頁。

<sup>39)</sup> 「烏蘭察布盟西公旗一回實態調査中間報告」『蒙古』昭和18年11月、60-86頁。

このようなモンゴルの実態をふまえて政府は医療設備の整備を図った。『善隣協会調査月報』の昭和13年12月号には次のような情報が掲載されている<sup>40)</sup>。

市民の保健と衛生施設の向上をはかる意味で各関係機関を網羅して結成した大同衛生委員会は十一月廿五日に〇〇部隊軍医部長をはじめ政府、領事館、居留民會、醫師會などの代表者出席した。

- 1、有病接客者収容の施設に関する件
- 2、傳染病患者収療施設に関する件
- 3、公立病院設置に関する件

以上の三件は資金調達の問題で具体的化まで至らなかった。そのほか、一般医療施設の向上、校醫の設定、貧民の診療汚物の排棄場所の問題その他について種々熱心なる検討協議が遂げられた。

上の情報を見る限り、保健と衛生施設の向上に軍と政府が積極的に関わっていたことがわかる。大同での整備に続いて張北と包頭にも診療所を設置した、と昭和15年3月号の『蒙古』に記されている<sup>41)</sup>。

蒙疆全民衆に対する衛生指導、體位向上の徹底を計り地方医療の強力なプランチとして、政府民生部では各市懸、旗に「保健所」を中央衛生行政機關の下に設置することに決定、着々計畫實施を進めつゝある。

従来診療機關としては民政部厚生科の下に官立醫院が張家口、大同、厚和に設置されてゐるが、末だ之等の機關では、民衆衛生の徹底は充分でなく、新たに設置される『保健所』は之等民衆の健康相談の外簡易診療をなし中央との有機的運結<sup>ママ</sup>を以て保健の萬全を期し宣撫施療の滲透を圖るのである。近く張北、包頭の二ヶ所に約十萬圓を以て夫々『保健所』設置が進められつゝあり、従来最も困難とされた現地人の新しい科學醫療に対する不信觀も一掃されたものと期待されている。

なほ、各官立醫院にても蒙漢醫院講習所、看護婦養成所を設け、醫學思想の普及徹底をはかり、日下厚和醫院にては興亜院が主體となつて卅名の蒙醫講習生を募集しつゝある。

日本と政府側は診療機關を設置することによって、現地の人々の「科學醫療に對

---

40) 「醫療施設に邁進」『善隣協会調査月報』昭和13年12月、72頁。

41) 「市懸旗に『診療所』：先づ張北包頭に設置」『蒙古』昭和15年3月、197頁。

する不信観」を一掃しようと計画していたことがわかる。具体的には、病院を作るだけでなく、病院内において「蒙漢醫院講習所と看護婦養成所を設け」、「醫學思想」を普及させ、「蒙醫講習生」を募集して教育していた。なお、蒙醫講習生の教育には興亜院が主体となっていたという<sup>42)</sup>。1940年12月になると、『蒙古』は「厚和病院近竣工：喇嘛醫養成所も併置」と報道している<sup>43)</sup>。

總工費百卅萬圓（中略）蒙疆に誇る醫學の殿堂として今から多大の注目と期待をかけられてゐる。本館二階建てで二階は院長及び職員室に充てられ、階下は事務室、外来患者診療室、二階半分も階下同様に外来患者診療室、二階奥は入院病棟で収容力八十名、更に別棟には傳染病患者病棟、外務室、物療科室、解剖室、死體室、喇嘛醫養成所、看護婦養成所等で、従来の病院とは比較にならぬ程善美をつくされてゐる。

このように、厚和病院は「蒙疆に誇る醫學の殿堂」と位置付けられている。ここでも「喇嘛醫養成所、看護婦養成所等」とが併設されているので、政府の政策どおりに進められていた様子がうかがえる。

日本はモンゴルの伝統的な知識人喇嘛を批判し、喇嘛醫の活動についても評価していなかった。しかし、上の諸資料から明らかなように、興亜院は喇嘛醫の養成に関わるように変わった。モンゴルの伝統的な医学者たちに近代医学の技術と思想を伝えようと方針転換したことが現れている。『蒙古』の昭和16年5月号に以下のような報告が寄せられている<sup>44)</sup>。

厚和病院内に開設された蒙醫養成所では昨年六月第一回生十六名（期間一ヶ年）を内蒙各旗に公醫として配置、第二回生二十四名は明春送り出す。四月下旬第三回生として百名の喇嘛醫ならびに蒙古青年を収容するとともに、新たに専門の教師二名を招聘するなど収容人員の増加、教育施設の擴充を行ふ。

興亜院主催の下で昭和15年から喇嘛醫の養成がはじまり、その養成期間は一年で募集人数も年ごとに増加していたことがわかる。終了後にモンゴル各地へ公医として配置していたのである。

昭和15年3月号の『蒙古』にあった「興亜院が主體となつて卅名の蒙醫講習生」

---

<sup>42)</sup> 興亜院については本庄比佐子、内山雅生、久保亨編『興亜院と戦時中国調査』（岩波書店、2002年）がある。

<sup>43)</sup> 「厚和病院近竣工：喇嘛醫養成所も併置」『蒙古』昭和15年12月、166頁。

<sup>44)</sup> 「ラマ醫に日本醫學の知識」『蒙古』昭和16年5月、135頁。

を育成中とのプログラムは完成したようで、同じ昭和15年3月号の『蒙古』は「蒙古人醫生卅名を養成」と伝えている。

蒙古人の間に新しい醫學衛生思想を普及する目的を以て、政府民政部厚生科では最初の現地蒙醫生養成に乗出し、今度蒙醫講習生卅名募集を開始、四月一日より厚和醫院で講習を開始することゝなつた。指導官は同院各醫師が之に當り、學課講養及び臨床醫學のアウトラインを教授し、更に全生徒を宿舍に収容して政府の費用で一切を支辨する養成期間は一ヶ年となつてゐる。

従来蒙古人の間には近代醫學に對する觀念は全然なく、頗る幼稚且非科學的な喇嘛僧の治術があるのみで、此の爲め却つて人體を害されることが多い。(中略) 將來はこれらの醫生も各自の希望によつてその儘醫院に残つて助手となり、或は更に研究を積んで茲に立派な蒙醫も出現することゝなり當局では宣撫と共に大に力を入れてゐる。

日本と政府の主導でモンゴルの伝統医学者である喇嘛醫を育成して、一定期間の近代教育を経て「蒙医」として認定された。一般的にモンゴルの喇嘛は一家の中から聡明な子が選ばれて出家する。彼らはモンゴル社会の知識人であるので、近代的な医学技術と思想をスムーズに受け入れることができた人々もいただろう。訓練を受けて喇嘛醫から「蒙医」になった人たちの配置について、昭和16年1月の『蒙古』は以下のように伝えている<sup>45)</sup>。

蒙古から花柳病を驅逐し、健康蒙古を建設しようとかねて巴盟公署では醫療機關の充實に努めて來た。(中略) 現在厚和病院で養成中の喇嘛醫を各地に公醫として配置する計畫で、近代醫療施設に恵まれぬ奥地民衆に大きな福音を齎すものとして多分の期待がかけられてゐる。

戦時体制下で行った医学者の育成について、現地社会の人々に「大な福音を齎すもの」との自己認識をしている。そして、喇嘛醫を公医として配置する目的は「蒙古から花柳病を驅逐し、健康蒙古を建設しよう」とする点にあると強調している。

看護婦の養成も順調に運ばれていた、と『蒙古』昭和17年12月号は以下のような情報を残している<sup>46)</sup>。

---

45) 「各旗に喇嘛醫：奥地民衆に近代醫療の恩恵」昭和16年1月、160頁。

46) 「蒙古軍病院近く竣工」『蒙古』昭和17年12月、114頁。

蒙古人の看護婦養成所を併置し、衛生兵の養成を併行して蒙古人婦女子に衛生學を施し、行くは全蒙人婦女の衛生觀念向上に資せしめるようとの計畫も立案されてをり、近く本格に實施される。

モンゴル自治邦政府の指導者徳王は女子教育を以前から重視していた、彼は自分の故郷西スニットに女学校を作っていた。モンゴル人女性を看護婦として育成する試みは注目に値する。

制度と施設の拡充は各地へと計画的に進められた。「蒙疆に於ける衛生診療機関としては京包線の各都市に官立醫院、同仁會醫院、蒙旗地帯に政府保健所、蒙古善隣協会診療班がある」。1943年11月になると、善隣協会は以下の地域で診療所を設けた。各診療所の診察対象は以下の表のとおりである。善隣協会の診療所は既に4つの盟をカバーし、モンゴルと回民、中国人と現地在住日本人に対して治療を施していたことがわかる。

|     | 診療所所在地 | 主なる対象民族 |
|-----|--------|---------|
| 伊 盟 | 大樹灣    | 蒙古人     |
|     | 西公旗    | 蒙古人     |
| 巴 盟 | 包頭     | 日、漢、蒙、回 |
|     | 薩拉齊    | 回族      |
|     | 厚和     | 回族      |
| 烏 盟 | トクミン廟  | 蒙古人     |
|     | 百靈廟    | 蒙古人     |
| 錫 盟 | 西ジャラン廟 | 蒙古人     |
|     | ベーリン廟  | 蒙古人     |

以上、『蒙古』に載ったモンゴルの衛生・医療に関する記事を整理し分析してきた。モンゴル自治邦政權に従事する日本人関係者たちがいつ、どこで現地調査を実施したか、その実態の一部が見えてきた。また、政府側が制度を充実化し、医療設備を設置していったプロセスも明らかになった。しかし、日本側の報告書の内容については再検討の余地がある。特に、性病と喇嘛医についての悪意的で、批判的な記述が目立つ。1930年代に出されたモンゴルに関する著作類について、モンゴル学者の田中克彦は次のように指摘している。不正確な資料で、非学術的な上、軍事上の目的で戦術的に書かれたものが多く、歪曲や中傷に満ちている。例えば、1938年に善隣協会調査部が東京の改造社から刊行した『蒙古大観』もその一例である<sup>47)</sup>。

47) モンゴル科学アカデミー歴史研究所編著、二木博史・今泉博・岡田和行訳、田中克彦監修『モンゴル史』1, (株)恒文社発行, 1988年, 49頁.

## 5 モンゴル人側の動き

モンゴル自治邦政府の最高指導者の徳王はモンゴル社会の近代化に熱心であり、モンゴル伝統医学の発展を心掛けていた。また、日本からの近代的な技術・知識を導入することにも積極的であった。彼は実際にモンゴル自治邦領内の西スニット旗において、近代的な「モンゴル医院」を設置した事実も広く知られている<sup>48)</sup>。モンゴル社会の伝統的な知識人喇嘛僧たちや一般のモンゴル人知識人たちもまた徳王の近代化政策に共鳴し、時代の流れに身を投じた。

1930～40年代のモンゴル社会では二つの知識人グループがいた。まずは、モンゴルの伝統的な知識人喇嘛である。もう一つは、近代教育を受けた知識層である。当時のモンゴル人たちはどちらも積極的に近代的な衛生観念と医学的技術を受け入れようとしていた。

善隣協会が内モンゴルに入ったばかりのことである。シリーンゴル盟の西スニットに診療所を建てるに当たって前川班長は徳王に挨拶に行った時に、徳王から次のように話しかけられた。

あなたがた協会の話は、かねてから承っています。日本の方々にはご不便な処ですが、これからは民衆のため、医療をぜひお願いします<sup>49)</sup>。

モンゴル人にとっては喇嘛が欠かせないほど積極的な影響をもっている事実を認めるべきであろう。なぜかという、長期に渡って喇嘛はモンゴル人社会のほとんど唯一の知識人階層として、草原の遊牧民にインドのアーユルヴェーダ系統の知識や疾病治療の方法を施してきた。また、喇嘛廟はモンゴル社会の文化教育の中心地になっていたからである<sup>50)</sup>。



写真4 シリーンゴル盟のモンゴル人。伊東恒治著『北支蒙疆の住居』より

<sup>48)</sup> Buyantu, *Mongghol Anaghaqu Uqaghan-u Manba Rasang-un Sudulul* (モンゴル医学部マンバラサンの研究), Öbür Monggol-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a, 2009, pp. 216.

<sup>49)</sup> 日本モンゴル協会編「蒙古進出の思い出—昭和九年ごろ—」前掲書, 1981年, 41頁.

<sup>50)</sup> Tayifūswe Jegün Ghar Sürüg-Güng Bolagh Nayiraghulan Keblekü Kesigün-no Qural Johiyaghšen, *Tayifūswe Jegün Ghar Sürüg-Güng Bolagh* (太仆寺左翼—貢宝拉格), Öbür Monggol-un Soyol-un Keblel-ün Qoriy-a, 2004, pp. 126–127.

例えば、太僕寺左旗では、1940年にマラゲイ寺で当旗最初の病院が建てられ、チベット医学の医学院マンバラサン<sup>51)</sup>を卒業したロブソンソドナム (Lobsangsodnam) が院長になっていた。病院は旗政府の経済的な支援を受けて運営されていた。病院にはサンワイダホワ (Sangwayidaghva)、ラトナ (Radn - a)、マカカラ (Mahakala)、ア・ハンボ (A・Hambu) ゲ・ゲベシ (G・Gebzi) などのモンゴル人名医 (喇嘛医) がいた。モンゴル人医者 (喇嘛医) らはチベット医学の經典にモンゴル語の注釈を付けて、薬材を収集し、薬剤を作っていた。その薬剤もよく効いていたと高く評価されていた。当時のモンゴル医者 (喇嘛医) たちはチベット語とモンゴル語の両方を読んで理解していたという事実が分かる。そして、大体同じ時期に、西洋医学の衛生所も設立されていた。衛生所には日本人の医者を招いて通訳をつけて西洋医学の治療も行っていた。日本人医師の下で働いていたのは全部モンゴル人で、彼らは当旗の最初の西洋医学の知識人となった。この衛生所は極めてシステムティックで、診察室と治療室、薬剤室、それに薬剤庫などからなっていた。子どものワクチン接種や伝染病ワクチンの接種なども担っていた<sup>52)</sup>。

当時モンゴル自治邦政府と日本の対モンゴル政策にしたがって、大勢のモンゴル人青年が日本に留学していた。その人たちはモンゴルの近代的な知識人層の中の一部になる。

例えば、シリーンゴル盟スニット左旗に清朝の康熙年間に建てられたチャガン・オボ寺 (福佑寺) があった。寺の活佛チャガングゲーン (別名ツエドンドルジパラマ、1886-1957) は同寺院の医学院の教育に熱心だった。彼は1932年に日本を訪問して各地を見学した。帰国後にはただちに地元で日本の近代化について紹介した。彼は60名もの若い喇嘛たちを集めて日本語を勉強させた。そして、1943年にはマンダラト寺で医学校を作り、ダシラブタンとジャムソら20数名の若い喇嘛たちにモンゴル語で医学について講義を行っていた。1947年は自身の寺で治療センターも設置していた<sup>53)</sup>。

喇嘛たちは例外なく近代化の波に巻き込まれた。モンゴル側の資料によると、包頭の近くにあった名刹バドゴル・ジュ<sup>54)</sup> (五當召) の活佛は伝統的なモンゴル医学の名医だったため、日本の海軍司令官の痛風を治したことで、大きく報道された

<sup>51)</sup> *Mongghol Sudulul-un Nebterkei Toli, Anaghaqu Uqaghan* (モンゴル学研究大辞典・医学巻), Öbür Mongghol-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a, 2002, pp. 569-572.

<sup>52)</sup> Tayifüswe Jegün Gar Sürüg-Güng, Bolagh Nayiragulan Keblekü Kesigün-no Qural Johiyagsen, *Tayifüswe Jegün Gar Sürüg-Güng Bolag* (太仆寺左翼一貢宝拉格), Öbür Mongghol-un Soyol-un Keblel-ün Qoriy-a, 2004, pp. 126-127.

<sup>53)</sup> 蘇尼特左旗政協文史組「查干葛根活佛生平事迹簡介」『内蒙古文史資料』(第19輯) 1985年, 182-189頁。

<sup>54)</sup> 長尾雅人も調査のためこの寺を訪れ、『蒙古学問寺』を書き上げた。

という。事実はどうであれ、モンゴル人側は自分たちの伝統的な医学が遅れているところか、「近代的」な日本人の患者の病氣まで治せたと自認している。

徳王が設置した女学校で教鞭を取っていた著名な詩人ナ・サインチョクト（別名サイチンガ）は1937年に選ばれて日本に留学していた。彼は日本の先進的な衛生・医療環境を称賛していた<sup>55)</sup>。また、ホルチン（胡爾欽、1916–1969年）という人物がいた。彼は本論文で触れたウラーチャブ盟西公旗の出身であった。1934年に徳王の面接試験に合格し、日本の善隣高商特設予科に入った。一年間の日本語学習を経て医科大学に入った。1942年9月に帰国したホルチンはモンゴル自治邦の衛生・医療の近代化に取り組んだ。彼は1942年5月にモンゴル自治邦の「医学代表团」の一員として東京を訪れ、「東亜医学会議」に参加した。中華人民共和国成立後、ホルチンは内モンゴル自治区衛生庁の庁長兼共産党委員会書記を務めた<sup>56)</sup>。彼は文化大革命中の1969年に中国人たちに殺害された<sup>57)</sup>。

1937年から1941年の間に日本に留学していた当時のモンゴル人学生たちの作った歌は以下のように歌われていた<sup>58)</sup>。

しとしと降る雨が  
柔らかき草原を潤す。  
モンゴルの若者たちは  
知の世界に燃える。  
熱き眼光に映る景色は  
ハーン・スウルガという佛塔だ。  
異郷に留学して学んだのちは  
故郷を復興させるのだ。

このように、モンゴル人青年たちは日本から学んだ知識を故郷の発展に貢献しようという情熱的な感情を歌にして表していたのである。

喇嘛はモンゴル人社会の伝統的な知識層としてモンゴル人から尊敬され、喇嘛医たちはインドやチベット医学の經典に基づいた、薬材収集から製薬、そして病気の

---

<sup>55)</sup> 「文芸戦報」編集部「把納・賽音朝克図揪出来示衆」『呼三司』、1967年11月15日。ナ・サインチョクトは『富士山賛歌』などのような有名な詩を書いたことで文化大革命中に中国政府から批判された。

<sup>56)</sup> 内蒙古自治区直属機関宣教口『魯迅兵团』、『衛生総部』、内モンゴル衛生庁『318』兵团『打倒三反分子胡爾欽！』1968年1月15日、1–18頁。

<sup>57)</sup> 楊海英『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』（上）岩波書店、2009年、185–186頁。

<sup>58)</sup> Tayifūswe Jegün Ghar Sürüg-Güng Bolagh Nayiragolan Keblekü Kesigün-no Qural Johiyaghshen, *Tayifūswe Jegün Ghar Sürüg-Güng Bolagh* (太仆寺左翼一貢宝拉格), Öbür Mongghol-un Soyol-un Keblel-ün Qoriy-a, 2004, pp. 118.

治療までおこなってモンゴル人たちの信頼を得ていたことがわかる。

モンゴル自治邦政府の人材育成政策と日本の植民地を支配するための人材育成政策の下で近代的な教育を受けた留学生らもモンゴル民族の復興のために努力する心情を有していた。

## おわりに

19世紀後半から西洋医学の知識がアジア諸国へ移入・導入され始めた。アジアでそれをリードしたのは明治維新以降の日本であった。如何なる「近代的」な衛生概念・医療技術が日本の植民地支配に伴って台湾・朝鮮へと持ち込まれ、そして満洲国及び隣接するモンゴル人の居住地域までに及んでいったのかは、至極重要な課題である。

日本は「近代」的な衛生思想・医療技術を植民地支配の統治装置として利用する際にモンゴル人の衛生・医療をまず「頑迷固陋・無智蒙昧なる」「貞操観念ない」「母系民族」「亂」「衛生観念缺除」「亂倫」とみなして、「後進民族」を「支援」する必要性を強調した。そのためにモンゴル社会の「落伍性」を大げさに誇張し、モンゴルの知識人・ラマ僧に対する誹謗を強化していったのである<sup>59)</sup>。同じ西洋医学の知識を受けた、西洋の探検家や人類学者たちの調査で表れるモンゴルの姿はきれいだし、清潔であった。このような対比から、日本は宗主国として上から目線でモンゴルをみていたということが明らかである。

モンゴル社会にはモンゴル人の生活習慣や長年の経験によって成り立った衛生習慣があった<sup>60)</sup>。また、インド・チベット医学のアーユルヴェーダの理論に基づいた喇嘛医も発達していた。このような衛生思想・医療手法が当時のモンゴル人たちにとっては効果的であったし、喇嘛医に関する文献資料も浩瀚の域に達する<sup>61)</sup>。日本と出会ってから、モンゴル人は王公から一般民衆まで、喇嘛医と併存して近代医学の知識を熱心に学んだ。1949年以降もモンゴルの伝統医学即ち喇嘛医は正式なモンゴル医学として内モンゴル自治区で使われつづけて、今日に至る。

植民地時代の先住民の健康状態が悪かったのは植民地主義の結果であり、先住民の健康の程度を示すものではない、と文化人類学者は指摘する<sup>62)</sup>。この見解はモンゴル人社会にも当てはまる。

---

<sup>59)</sup> リ・ナランゴア、前掲論文。

<sup>60)</sup> 萩原守「〈ト・ワンの教え〉について—19世紀ハルハ・モンゴルにおける遊牧生活の教訓書」『国立民族学博物館研究報告』別冊20号、213-285頁。

<sup>61)</sup> 楊海英編『ランタブーチベット・モンゴル医学古典名著』、大学教育出版、2002年。

<sup>62)</sup> Lola Romanucci-Ross 著、波平恵美子訳『医療の人類学』序文 xxv 頁。

日本人は西洋医学の知識を内モンゴル中部に持ち込み、現地のモンゴル人青年に近代医学の知識を教えたことはある一定の効果があったと考えられる。その活動は日本政府の植民地支配という背景の元で行ったため、宗主国の植民地での活動の妥当性を強調するために現地社会の実情を歪めることもまた当然行われていたであろう<sup>63)</sup>。

## 参考文献

### 日本語文献

- 伊東恒治『北支蒙疆の居住』弘文堂，1943年。  
内田知行・柴田善雅編『日本の蒙疆占領1937-1945』研文出版，2007年。  
ウラデミルツォフ著 外務省調査部譯『蒙古社会制度史研究』生活社，1941年。  
後藤富男「善隣協会は何をやり残したか」日本モンゴル協会編『善隣協会史—内モンゴルにおける文化活動』1981年。  
善隣協会調査部編『蒙古』昭和14年10月号，昭和14年9月号，昭和15年3月号，昭和15年12月号，昭和16年5月号，昭和16年1月号，昭和16年6月号，昭和17年12月号，昭和18年11月号，昭和18年3月号，昭和18年11月号。  
善隣協会調査部編『善隣協会調査月報』昭和13年12月。  
善隣協会調査部編『蒙古大観』改造社，1938年。  
東亜會「蒙疆建設の性格」『東亜』1942年11月号。  
ドムチョクドンロブ著，森久男訳『徳王自伝』岩波書店，1994年。  
中見立夫『「満蒙問題」の歴史的構図』東京大学出版会，2013年。  
長尾雅人『蒙古学問寺』中公文庫，1992年。  
日本モンゴル協会編『善隣協会史—内モンゴルにおける文化活動』1981年。  
萩原守「〈ト・ワンの教え〉について—19世紀ハルハ・モンゴルにおける遊牧生活の教訓書」『国立民族学博物館研究報告』別冊20号，213-285頁。  
ハスチムガ「内モンゴルにおける衛生・医療に関する調査報告について—善隣協会と陸軍軍医部による調査—」国際シンポジウム『20世紀初，中国周縁エスニティの覚醒に関する比較研究』発表論文（早稲田大学，2014年12月20日）。  
二木博史「蒙疆政権時代のモンゴル語定期刊行物について」『日本モンゴル学会紀要』第31号，2001年。  
本庄比佐子，内山雅生，久保亨編『興亜院と戦時中国調査』岩波書店，2002年。

---

<sup>63)</sup> Yang Dorji, *Mona Aghulan dahi Badkar Sümü* (陰山五當召), Öbür Mongghol-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a, 2008, pp. 161-165.

モンゴル科学アカデミー歴史研究所編著，二木博史・今泉博・岡田和行訳，田中克彦監修『モンゴル史』1，(株)恒文社発行，1988年。

楊海英『草原と馬とモンゴル人』日本放送出版協会，2001年。

楊海英編『ランタブーチベット・モンゴル医学古典名著』，大学教育出版，2002年。

楊海英『墓標なき草原―内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』(上) 岩波書店，2009年。

楊海英『中国とモンゴルのはざまで―ウラーンフーの実らなかった民族自決の夢』岩波書店，2013年。

Lola Romanucci-Ross 著，波平恵美子訳『医療の人類学』序文xxv頁。

リ・ナランゴア「僧侶動員と仏教改革」『北東アジア研究』7月号，2004年。

ローミンチェン著，塚原東吾訳『医師の社会史：植民地台湾の近代と民俗』法政大学出版局，2014年。

#### モンゴル語文献

Buyantu, *Mongghol Anaghaqu Uqaghan-u Manba Rasang-un Sudulul* (モンゴル医学部マンバラサンの研究), Öbür Mongghol-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a, 2009, pp. 216.

*Mongghol Sudulul-un Nebterkei Toli Anagaqu Uqaghan* (モンゴル学研究大辞典・医学巻), Öbür Mongghol-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a, 2002.

Tayifüswe Jegün Ghar Sürüg-Güng Bolagh Nayiraghulan Keblekü Kesigün-no Qural Johiyaghshen, *Tayifüswe Jegün Ghar Sürüg-Güng Bolagh* (太仆寺左翼一貢宝拉格), Öbür Mongghol-un Soyol-un Keblel-ün Qoriy-a, 2004.

Yang Dorji, *Mona Aghulan dahi Badkar Sümü* (陰山五當召), Öbür Mongghol-un Arad-un Keblel-ün Qoriy-a, 2008.

#### 英語文献

Christopher Kaplonski, 2004, *The Lama Question*, University of Hawai'i Press, Honolulu.

Li Narangoa and Robert Cribb, 2003, Japan and the Transformation of National Identities in Asia in the Imperial Era, in Li Narangoa and Robert Cribb (eds), *Imperial Japan and National Identities in Asia, 1895-1945*. London and New York: Routledge Curzon.

#### 中国語文献

金海『日本占領時期内蒙古―歴史研究』内蒙古人民出版社，2005年。

劉士永「一九三〇年代以前日治時期台灣醫學的特質」『中央研究院台灣史研究』1997年。

劉士永「「清潔」・「衛生」及「保健」—日治時期台灣社會公共衛生觀念之轉變」『台灣史研究』2001年。

內蒙古自治區直屬機關宣教口『魯迅兵團』，『衛生總部』，內蒙古衛生庁『318』兵團『打倒三反分子胡爾欽！』1968年1月15日。

「文芸戰報」編輯部「把納・賽音朝克圖揪出來示衆」『呼三司』，1967年11月15日。

蘇尼特左旗政協文史組「查干葛根活佛生平事迹簡介」『內蒙古文史資料』（第19輯）1985年。

札奇斯欽『我所知道的德王和當時的內蒙古』東京外國語大學アジ・アフリカ言語文化研究所，1985年。